

戦前の吉野川水系祖谷川の発電所工事と朝鮮人労働者

広瀬 貞三*

はじめに

戦前の日本で、多くの朝鮮人労働者は各種土木工事に従事した。私はこの間、三信鉄道工事（長野県）、太田川発電所工事（広島県）、富士川水系笛吹川改修工事（山梨県）、木曾川発電所工事（岐阜県、長野県）、小牧ダム建設工事（富山県）を取り上げ、朝鮮人労働者の労働と生活の実態を明らかにしてきた¹。今回は新たな事例研究として、吉野川水系祖谷川（以下、祖谷川とする）の発電所工事を取り上げる。

吉野川は「四国三郎」とよばれ、四国、日本を代表する大河川である。初期に発電所工事が集中したのは、徳島県

の山岳地帯にある祖谷川である。一九一〇年代から二つの電力会社（四国水力電気、祖谷川水力電気）によって、四つの水力発電所（三縄発電所、祖谷発電所、出合発電所、一字^{いちぢやう}発電所）が設置された。これらの工事には多数の労働者（日本人、朝鮮人）が従事したと推定される。

これまで戦前における徳島県の朝鮮人に関する研究はない。また、祖谷川における発電所工事と朝鮮人労働者の関係について明らかにした専論もない。わずかに一研究が朝鮮人労働者の存在を証言から言及している程度である。²

本稿でこうした研究の現状から、次の四点に焦点を絞って見ていく。第一に、徳島県への朝鮮人の流入と定着化過程を概略的に把握する。第二に、祖谷川における水力発電所工事の事態を明らかにする。いずれも中小発電所だが、厳しい地形のため工事は困難を伴った。第三に、祖谷川で四国水力電気が進めた一字発電所工事（一九三六年五月竣工）の全体像と労働者の存在の解明である。この発電所については比較的史料が残っているため、ある程度の復元が可能である。第四に、朝鮮人労働者との関連で、同時期に実施された国鉄土讃本線工事の全体像と労働者の存在を明らかにする。この工事が多くの労働者を徳島県に誘引し、四国内部に浸透させたと思われる。

本稿に関しては、企業者である四国水力電気、祖谷川水力電気、建設会社である飛鳥組（現在の飛鳥建設）、森本組、大倉土木（現在の大成建設）にまつた一次史料は残っていない。このために史料としては、『徳島毎日新聞』（三年分）³と、各企業の社史、県市町村史を中心に使用する。

一・朝鮮人の徳島県内への流入と定着

(1) 内務省統計資料の分析

ここでは内務省警保局が作成した統計資料を使用する。この統計が実態をどこまで正確に反映しているかは疑問点も残る。しかし、最も網羅的、かつ詳細なため、この統計を使用する。

まず、全国の中で徳島県の朝鮮人の数がどの程度なのか見てみる。一九三二年を基準にする。同年一二月末時点で四七都道府県中、朝鮮人が多いのは、大阪(二二万四七四九名)、兵庫(五万八四八五名)、愛知(五万六五二三名)、東京(五万四七七六名)、福岡(四万六三三七名)、京都(四万四九九三名)、山口(三万一五二〇名)の順である。⁴一方、朝鮮人が少ないのは、沖縄(七七名)、山形(三四〇名)、青森(三六五名)、秋田(四五九名)、宮城(九八四名)、栃木(二〇四六名)、岩手(一一五七名)、香川(一三四七名)、茨城(一三四八名)、鹿児島(一三五二名)、福島(一四六四名)、鳥取(二五〇五名)、高知(一七二七名)、徳島(一七二九名)の順であり、徳島は一四位となる。⁵この中には四国四県の内で三県が含まれており、四国は極めて朝鮮人が少ない地域だった。

続いて、同年一二月末時点における徳島県の朝鮮人の職業を見てみる。総計一七二九名であり、多い順に、土木建設業(土工夫、その他)五七七名(三三・四%)、商業(普通商人、商業)一四二名(八・二%)、その他の職業(農業、漁業、繊維工業、化学工業、食料品製造、通信交通運輸業、沖仕業、接客業者、その他の有業者)一五九名(九・

二%）、その他の労働者一一五名（六・七%）、一般使用人（農夫、漁夫、家事及びその他）三六名（二・一%）、無職七〇〇名（四〇・五%）となる。土木建設業の比重が圧倒的であり、有業者全体の五九・五%を占めている。

朝鮮人の出身道を多い順に見ると、慶尚南道が七二四名（四一・九%）、慶尚北道が四二三名（二四・五%）、全羅南道が一九二名（一一・一%）、全羅北道が一三五名（七・八%）、忠清南道が一二九名（七・五%）である。慶尚道だけで六六・四%を占めている。教育程度は「文盲者」が七二二名（四一・八%）、小学校程度が六八五名（三九・六%）であり、この両者だけで八一・四%と圧倒的に多数だった。留学生は高等学校または専門学校程度が一名である。在留朝鮮人主要団体は共產主義系、社会民主主義系、国家主義系、無政府主義系、民族主義系のいずれもなく、後述する融和団体（会員五〇名）が一つだけだった。主要団体の参加者数は四七都道府県で見ると、栃木（二三名）、青森（三〇名）、鹿児島（四九名）に次ぐ低水準だった。また、独立運動家である「特別要視察人甲号」も一名だけだった。このように、徳島県の朝鮮人は土木建設業への従事者が多く、教育程度は低く、各種団体加盟者も極めて少なかった。

表1は一九二〇年から一九四二年に至る徳島県の朝鮮人の数である。これからいくつか特徴的なことがわかる。第一に、朝鮮人の数は一九二〇年の四四名から一九四二年の一七八九名へと、二〇年間に四〇・七倍へ大きく増加している。これは全国的な傾向でもあるが、朝鮮人は急速に日本社会に定着していったといえる。⁸

第二に、朝鮮人の増加には二つの起点があり、一九二一年から一九二四年の間に百名台となり、一九三三年から

表 1・徳島県内朝鮮人の人口数（1920～1942年）

			1920年 6月末 現在	1921年 6月末 現在	1924年 12月末 現在	1925年 6月末 現在	1926年 6月末 現在	1932年 12月末 現在	1933年 12月末 現在	1934年 12月末 現在	1936年 12月末 現在	1937年 12月末 現在	1938年 12月末 現在	1939年 12月末 現在	1940年 12月末 現在	1941年 12月末 現在	1942年 12月末 現在
90日以上 同一市町村に居住 する者	世帯を 有する 者	家族持 世帯人数									583	944	1025	1039	1124	1230	1442
		単身者									59	108	3	62	18	80	163
		小計	31	45	24	62	68	383	764	814	642	1052	1028	1101	1142	1310	138
	世帯を持たぬ者		16	23	62	133	329	141	523	316	320	187	128	74	150	113	1605
	合計		47	68	86	195	397	524	1287	1130	962	1239	1156	1175	1292	1423	1743
同上 90日未満 の者	世帯を 有する 者	家族持 世帯人数									369	143	90	34	33	36	34
		単身者									14	30	0	3	0	3	2
		小計									384	173	90	37	33	39	36
	世帯を持たぬ者										384	34	13	2	18	20	10
	合計		0	0	67	234	67	109	1519	196	767	207	103	39	51	59	46
総計			44	32	153	429	467	633	633	1326	1729	1446	1259	1214	1343	1482	1789

内務省警保局「朝鮮人概況」、「在留朝鮮人ノ状況」、「在留朝鮮人運動」、内務省社会局「朝鮮人労働者に関する状況」、朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』全5巻（三一書房、1975～1976年）から作成。

表の作成方式は、金浩「山梨県における在日朝鮮人の形成状況」『在日朝鮮人史研究』11号（1983年3月）21頁を踏襲した。

一九三四年に一举に千名台になっている点である。つまり、一九二〇年代初めと一九三四年に朝鮮人を徳島県に誘引する大きな契機があったと思われる。後述するように、祖谷川における四つの発電所工事は一九一一年から一九三六年まで、国鉄土讃北線の鉄道工事は一九二〇年から一九三五年まで各々続いている。この二つの工事と一定の関連があるのではないかと推察する。

第三に、「世帯を持たぬ者」、つまり単身者の数が「九〇日以上」、「九〇日未満」の居住者を問わず、大きな増減を繰り返している点である。これは単身者にとって就業機会の獲得と喪失（失業）がしばしば繰り返されたことを反映している。第四に、「世帯を有する者」に着目すると、「九〇日以上同一市町村に居住する者」の「家族持世帯人数」が一九三六年から

一九四二年まで着実に増加している。これに反して、「九〇日未満同一市町村に居住する者」のそれは同期間に三六九名から三四名に激減している。これらは朝鮮人の所帯持ちが増え、その中でも短期間滞在家族が激減したためと思われる。

(2) 朝鮮人に関する主な事項

一九三二年（月は不明）に板野郡撫養町里浦で朝鮮人土工の乱闘事件が発生した。これは『徳島県警察史』が昭和前期の「凶悪犯罪」の一つとしてあげているほどであり、大規模だったと思われる。⁹

新聞報道によれば、一九三四年九月末時点で、徳島県内の朝鮮人は男性一一〇三名、女性四一四名で、合計一五一七名である。昨年同期より四七四名も増加している。「鉄道工事場から水力発電所工事の人夫には彼らがあつとも利用されて居る」といい、朝鮮人の大多数は土工であるとする。これは「労働賃金安の關係から最近徳島県内へも朝鮮人が夥しく流れ込んで、内地人労働者を驚異せしめて居る」という。¹⁰これは表1の同年の数より一九一名も多い。

融和団体として、一九三四年一〇月に金亀煥、金保顕が中心となり、徳島内鮮親睦会が発足した。会員数は五〇名である。¹¹同年一〇月、徳島市の前川座に八〇余名の朝鮮人が集まり、皇室中心主義の下に日本人と朝鮮人は融和を図るべきだと主張した。¹²同年一〇月に徳島市の事務所に一五名が集まり、役員会を開催した。¹³

一九三六年六月に内務官僚の主導で中央協和会（関屋貞三郎理事長）が樹立された。在日朝鮮人を抑圧・統制する

組織である。これに呼応して、同年一月に徳島県協和会が県庁社会課内に設立され、警察署管区単位に一三支会を設けた。同月、愛国婦人会館で発会式が行われ、九〇余名が出席した。参加者は会長の荒木知事、副会長の塩屋学務部長・池田警察部長、長谷川師範学校長、大西憲兵分隊長などだった。¹⁴ 一九四三年時点における徳島県内の警察署は、徳島（徳島市徳島町）、撫養（板野郡撫養町）、板西（板野郡板西町）、石井（名西郡石井町）、川島（麻植郡川島町）、市場（阿波郡市場町）、脇町（美馬郡脇町）、貞光（美馬郡貞光町）、池田（三好郡池田町）、小松島（勝浦郡小松島町）、富岡（那賀郡富岡町）、鷺敷（那賀郡鷺敷町）、牟岐（海部郡牟岐町）の一三カ所である。¹⁵ つまり、この一三地域全てに朝鮮人は居住していたのである。

貞光支会は一九四〇年一月一九日、徳島支会は一月二三日、富岡支会は一月二七日、市場支会は二月一六日に結成された。¹⁶ 徳島県協和会池田支会は一九三九年一月、池田警察署で結成式をあげた。池田警察署管内には朝鮮人が約七〇名居住していた。一九四二年一月、池田支会は四班に分かれ、長瀬製材所、丸五製材所、堀部製材所、吉井製材所で勤労働員を行い、報酬は国防献金にあてた。¹⁷ 徳島支会では一九四一年一月、指導者講習会を行い、婦人部が結成された。¹⁸

一九三九年九月から日本政府は朝鮮人強制連行を開始した。徳島県内には日本鉱業の高城鉱山（麻植郡三山村）に一九三九年、一九四〇年に合計一一〇名の朝鮮人の動員が承認された。¹⁹ これ以外にも伊予川発電所工事（一九四二年着工）、軍工事等へ朝鮮人は動員されたようだが、詳細は不明である。²⁰

二・吉野川水系祖谷川の水力発電所工事

(1) 吉野川の特徴

吉野川はその源を高知県土佐郡の瓶ヶ森（一八九七m）に発し、四国山脈に沿って東に流れ、敷岩において穴内川を合わせて北に向きをかえて四国山脈を横断する。祖谷川、銅山川などを合わせて徳島県池田において再び東に向かい、岩津を経て徳島平野に出て大小の支川を合わせながら紀伊水道に注ぐ。その流域は四国四県にまたがり、面積は三六五〇km²であり、幹川流路延長は一九〇kmに達する。古来より東の坂東太郎（利根川）、西の筑紫次郎（筑後川）とともに「四国三郎」と呼ばれ、単に四国第一の河川であるばかりでなく、全国的に見ても有数の大山河川として知られてきた。支流としては、祖谷川、銅山川、鮎喰川、穴吹川、貞光川、地藏寺川、川田川、飯尾川などがある。²¹

本稿で取り上げる支流の祖谷川は徳島県の最高峰である剣山（一九五四・七m）を源とし、三好郡の東祖谷山村・西祖谷山村内を西流する。西祖谷山村善徳付近で北に転じ、山城町川崎で吉野川にそそぐ。延長五三・八km、流域総面積約三七〇km²で、吉野川の支流の中では最大規模の河川である。特に善徳―川崎間の下流部は四国山地を貫く横谷をなし、祖谷溪と呼ばれる深いV字谷を形成する。流域に平地はほとんどなく、縦谷部では多くは地滑り地である山腹の緩斜面に集落が立地する。傾斜した畑地では葉タバコ・ソバが栽培される。²²

(2) 徳島県内の電気事業の展開

四国の電気事業は一八九五年に徳島市の徳島電灯から始まった。その後多くの電力会社が生まれて、統合を繰り返した。一九二〇年代中期になると、徳島県では徳島水力電気、香川県では四国水力電気、高知県では土佐電気と高知県営電気、愛媛県では伊予電気の五大電力が成立した。²³

ここでは徳島県内の電気事業の展開を見てみよう。県内では徳島水力電気と四国水力電気の競合が続いた。一九一〇年に開業した徳島水力電気（武智正次郎社長）は開業後に先行の徳島電灯、撫養電気を合併した。さらに、徳島水力電気は一九一八年に川田水力電気を、一九一九年に神通電気を合併した。その後、淡路島に進出し、多くの電力会社を合併した。続けて一九二二年に後述する祖谷川水力電気を合併した。一九二三年に三重合同電気（本社は三重県津市）と合併し、徳島水力電気は三重合同電気の徳島支店となった。その後も横瀬水力電灯、佐那河内水力電気を合併し、大きな地位を確立した。一九三〇年に合同電気徳島支店となり、一九三七年に東邦電力と合併し、東邦電力徳島支店となった。²⁴

一方、四国水力電気は一八九八年に設立された香川県の西讃電燈が出発点である。これが一九〇〇年に讃岐電気と改称され、一九〇三年に開業して西讃地域に電気を供給した。一九〇七年に景山甚右衛門（一八五五～一九三七）を社長に迎えた後、急速に発展した。景山は多津銀行、讃岐鉄道、坂出紡績を経営する香川県の実業家で、後に衆議院議員も務めた。景山社長は水力発電に着目し、調査の末に後述する徳島県祖谷川の水を利用した三縄発電所を建設し

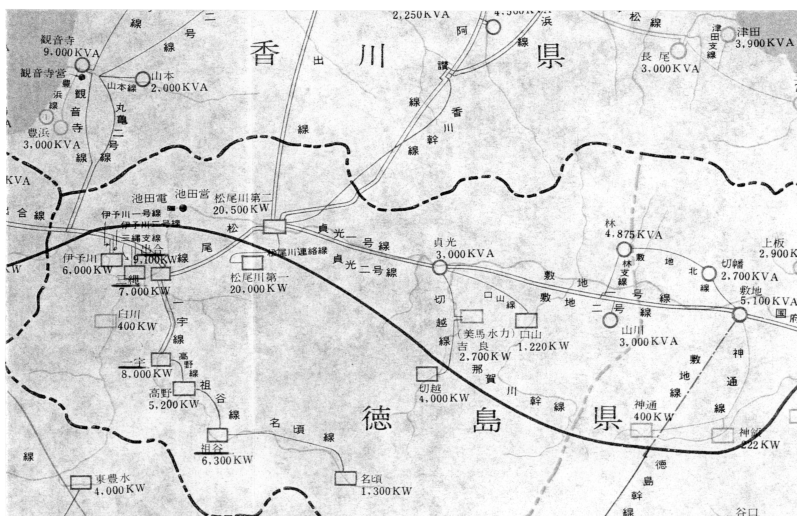
た。これによって高松市を含む県下一円に電力を供給することを計画した。一九一〇年に名古屋電燈取締役の福沢桃介（一八六八―一九三八）の援助を得て、資本金を一二〇万円に増資するとともに、社名を四国水力電気と改称した。一九一一年に福沢を社長、取締役に東邦電力社長の松永安左衛門（一八七五―一九七二）を迎え、景山は副社長に就いた。四国水力電気は一九一三年に徳島県西部に電力供給を行っていた辻町水力電気を合併した。さらに同年に東讃電気軌道が持っていた香川水力電気の経営権を買収した。これによって徳島県三好郡の七町村と香川郡の九町村を営業区域に加えた。一九二四年一月に景山は社長を退任し、第三代社長に取締役の寒川恒貞（一八七五―一九四五）が就任した。²⁵

一九三九年三月に国策の日本発送電が設立され、四国の五大電力の内、土佐電気を除く四事業者（東邦電力、高知県電気局、伊予鉄道電気、四国水力電気）などはこれに吸収・合併された。日本発送電はその後も事業者を統合し、その結果、四国における電気事業は四国中央電力（後の住友共同電力）と美馬水力電気を除き完全に統一された。日本発送電が四国で実施した工事は、長澤貯水池（高知県）、津賀発電所（高知県）、小村発電所（高知県）、第五黒川発電所（高知県）である。²⁶ 徳島県内では一九四二年二月伊予川開発（美馬水力電気と住友共同電力が出資）が吉野川水系伊予川・相川谷に伊予川発電所（山城谷村）工事を開始したが、後に中止となった。²⁷

（３）初期の水力発電所工事

図１はこの時期、祖谷川に設置された発電所の位置である。上流から祖谷発電所、一字発電所、三縄発電所、出合

図 1・吉野川水系祖谷川の発電所（1961 年 4 月現在）



して寒川恒貞（後に四国水力電気社長）が参加した。³⁰ただ、社史には工事を施工した会社名が書かれていない。そのため、直営で施工したのではないかと推測する。時期的に「韓国併合」の翌年であり、朝鮮人労働者が工事に従事した可能性は低いとみる。

②祖谷発電所（祖谷川水力電気）

一九二〇年三月に高知県出身の松村覚次が中心となり、祖谷川水力電気（資本金百万円）が発足した。社長は宇田友三郎、常務は吉本彦次、取締役は松村、川崎幾三郎、野中幸衛門、監査役が中川喜義だった。いずれも高知県実業界の第一人者である。祖谷川水力電気は三縄発電所の上流部に祖谷発電所工事を着手した。祖谷発電所建設事務所（東祖谷山村若林）を置き、初代所長に小田林（元内務省吉野川改修工事事務所技師）、二代目に西川寿恵吉（元高知県土木課長）が就任した。³¹

工事は祖谷川本流の菅生と切谷に堰堤を設け、ここから鉄管、暗渠、明渠によって左岸沿いに若林発電所へ送水するものである。出力は祖谷川系が五千kW、支流の谷道川系が千kWである。電力は高知県に送電した。³²工事に先立ち、宇田社長は松村取締役に対して用地買収費として四万五千円を出した。³³

工事は一九二二年四月に着工し、一年後の一九二三年四月に竣工した。着工直後に隧道工事を請け負った熊谷組はいろいろな事情から途中で投げ出した。その後、全体の工事は飛鳥組、森本組が受注した。労働者は延二四万五千名、セメント五千トン、鉄類六九三トン、木材一万九千石（約五七〇〇m³）、工事費は五〇九万五千円だった。³⁴

祖谷川水力電気の関係者（社員、労働者）はほとんど高知県人だった。国鉄土讃本線はまだ開通していないので、高知・池田間は定期乗合自動車、池田から若林までは人力車を用いた。労働者も高知県人が多く、大槌まで自動車、そこから徒歩で若林に向った。徒歩行程は約二〇kmだった。³⁵

飛鳥組と森本組の担当区域は明らかではない。飛鳥組は福井出身の飛鳥文次郎（一八五〇～一九二九）が一八八三年に創業し、飛鳥文吉（一八七六～一九三九）が一九一六年に株式会社へ改編した。³⁶ 飛鳥組の社史でこの工事についてなにも記述していない。ただこの次に着工された出合発電所（四国水力電気）は井伊与三五郎（一八六三～一九四二）部長が担当しているので、おそらくこれも井伊部長の施工部隊が現場に入ったと思われる。

森本組は一八九〇年に奈良県出身の森本千吉（一八六四～一九三七）が創業し、大阪市に本店を構えた。社史ではこの工事を次のように記録している。「工事現場となった東祖谷村落合は、「祖谷のかずら橋」で有名な秘境・祖谷溪からさらに20kmあまりも祖谷川をさかのぼったところで、現場に赴任していたある組員によると、大阪から船で小松島へ渡り、汽車で池田まで行き、さらに人力車で祖谷へ到達したという。（中略）この現場で当初主任を務めた松村力蔵は、工事途中で病を得て帰阪、入院。闘病の甲斐なく、「大正」15年に亡くなった」。³⁷ 森本組は大阪から船で小松島へ行き、鉄道で徳島から池田に向い、ここから人力車で現場に向かったことがわかる。

松村はこの工事の前に一九一九年一月から一九二〇年二月まで、「東海道本線芦屋東灘間複線工事」（請負金額六五万円）の主任を務めており、配下は作花岩五郎、清原善三郎、和田定蔵だった。³⁸ おそらく村松はこれらの施工部

隊をつれて、祖谷の現場に入ったと思われる。

一九二一年九月、現場の東祖谷山村巡查部長派出所に警官として入った二六歳の岡田亀太郎（後に小松島警察署長）は八〇歳になって仕事を振りかえり、現場の様子を詳細に述べている。祖谷発電所工事を担当した建設会社の雰囲気がよくわかる。まず、関連者たちの特異な横顔である。「東祖谷山村字若林に、祖谷水力発電工事が真最中で、多くの人夫が入込んでいて、いつ暴力沙汰が起こるかもしれない」状況だった。「発電所所長は西川寿恵吉、元高知県安芸郡長であった人、事務員に横山春茂がいた。松村〔覚次〕重役にもあったことがある。工事の総請負者は水力電気工事のベテランである飛鳥組であった。飛鳥組の責任者名は忘れたが、五十過ぎの物わかりの良さそうな人であった。その人から「モッコ憲法」の説明を興味深く聞いた。中間請負に宮本組がいた。その下に内藤組など多くの飯場があり、人夫は数百もいたと思う。人夫頭の中には、嘗って刃物で腹を刺されたものか、大きな創あとから拳太の腸が出ているもの、背中や腕に刺青をしている者はザラであって、しかもこれを誇らしげにあらわして往来するのである。小さい暴力沙汰は日常茶飯事、さすがに少々ことは警察に届けてこない。これが「モッコ憲法」何条かにあるものとみえる」。³⁹

また、岡田は賃金をめぐる現場の混乱も具体的に記録している。「彼〔岡田〕はある一日不穏な聞き込みをした。それは中間請負の宮本組（代表者宮本静）が、飛鳥組から請負金（中間払）を受取って下部の請負人に支払わないので、一般人夫が明日から食う米がない始末で、宮本組をやっつけろ、勿論工事を中止すると意気まき、暴動でも起こ

りそうな気配があった。彼〔岡田〕は飛鳥組代表にかけ合ったが、出来高により約束通りに支払ってあるから、一切金は出せないと拒否し続けた。この後、岡田の立ち合いの下、宮本組長とその下部の親方一〇名が談判をした。この席上から宮本組長が密かに逃亡する事態が発生した。⁴⁰ 飛鳥組、配下の宮本組、さらにはその下部の親方一〇名の関係がよくわかる。

飛鳥組が朝鮮人労働者を集団で導入したのは、木曽川水系木曽川の大桑発電所工事（一九一九年四月着工）からである。⁴¹ このため、この工事現場にも朝鮮人がいた可能性があるが、明確な史料がない。

事故について、一書は次のようにいう。「現場で岩石が落下して数人が重傷を負い、徹夜で祖谷街道をかつぎ出したが、連続する松明の光に驚いたか祖谷川の対岸でしきりにサルが鳴き、負傷者は天明とともに池田町の北条病院で応急手当を加え徳島市の若林病院に入院させた」。⁴² 負傷者は現場から祖谷街道を通って、池田町の病院まで移送したのである。

③ 出合発電所（四国水力電気）

一九二四年一二月に寒川恒貞が四国水力電気の社長に就任すると、当初計画していた吉野川水系松尾川の発電所工事は中止し、祖谷川の出合発電所工事に着手した。これは三縄発電所の上流部である。工事は一九二五年四月から一九二六年九月まで一年半である。電気工事は直営とし、土木工事は飛鳥組、送電線路工事は正興商会、日本電気工業商會が担当した。⁴³ 工事費は三五万七千円で、延労働者数は三五万五〇〇名である。⁴⁴

工事は西祖谷山村善徳に堰堤を築いて祖谷川を堰き止め、隧道四千mを通して松尾川との合流点である「出合」に建設する出合発電所（三好郡三繩村大字大利字カケヤブ）に導水する。落差一二三mをもって、出力六〇八〇kWを得るものである。当時としては四国最大の発電所工事だった。一九三〇年九月に発電機（一号、二号）の運転を開始した。一九三四年三月に第三号機の運転が行われ、これによって最大出力九千kWに増加した。⁴⁵

飛鳥組では祖谷発電所工事に続き、井伊与三五郎部長が担当した。⁴⁶ 井伊は福井県吉田郡出身で、一九一三年に越前電鉄工事（京都電燈）から飛鳥組に参加した。一九一六年九月第一次飛鳥組結成時に取締役となり、一九三〇年まで役員として在任し、近畿・四国・九州方面の工事を担当した。⁴⁷ 飛鳥組の請負金額は一六六万四千円である。飛鳥組の社史は工事の内容については何も触れず、「四国の電源はその後続々開発されたが、当時においては四国随一の規模の発電所」⁴⁸とだけ記録している。

飛鳥組は一九二五年三月から工事に着手した。すでに飛鳥組の関係者三〇名が工事出張所に集まり、「工夫其他工夫等五百名程入り込み」、工事には一日一五〇〇名の工夫が必要だと、『徳島毎日新聞』は報道した。⁴⁹ また、『池田町史』には、「工事中出合には河原から山間まで至る所に飯場が建ち、工夫は五〇〇人に上ったという」⁵⁰との記録がある。この労働者の中の朝鮮人がいたかどうかは明らかではない。しかし、飛鳥組の井伊部長下の施工部隊が同じ地域で工事を担当していること、一九二五年の工事着工と二つの点を考えると、朝鮮人労働者がいた可能性が大きい。

四国電力の社員である阿部某は西祖谷村の用地を買収・使用するにあたり、同村の一字・一字枝・田ノ内には特に

点燈料を減額する旨を声明し、住民の歓心と援助を求めた。また、工事の途中、三繩村の「重兵衛ずり」付近の隧道内から温泉が湧出して、世人を驚かせた。⁵¹ 工事に伴い多数の社員・労働者が続々現地出合に集合して、工事に従事したので池田町との往来は特に頻繁になった。この状況に即して池田町の山川隆資は一九二五年に株式会社を組織して自動車を買入れ、自ら運転手となって乗合自動車の営業を開始したところ、利用者は意外に多く、多大の利益を収めた。⁵²

三・一字発電所工事（四国水電）の全体像

（1）一字発電所工事の展開

四国水電は出合発電所工事が竣工すると、続いて祖谷川の最上流部である一字発電所工事にのりだした。計画は西祖谷山村の栗寄に堰堤（堤高一・五m、堤長五〇・八五m）を設け、祖谷川右岸に取水口を作り、延長三五・四・八mの隧道を通して有効落差一〇六・四mを得て、一五七・七mの水圧鉄管二条で一字発電所（落シ倉）に導く。最大出力は八千kWである。工事は一九三三年六月に起工し、三年後の一九三六年五月に竣工した。工事費は二九八万一〇〇〇円で、労働者の延人員は三〇万人である。⁵³

工事は大倉土木が特命で受注した。大倉土木（現在の大成建設）は大倉喜八郎（一八三七～一九二八）が一八八七戦前の吉野川水系祖谷川の発電所工事と朝鮮人労働者（広瀬）

年に設立した、日本初の法人建設会社である日本土木会社が起点となる。これが一八九三年に大倉土木組、一九一一年に大倉組土木部となり、一九一七年に大倉土木が成立した。一九二四年から門野重九郎（一八六七～一九五八）が会長となり、横山信毅（一八七五～一九三三）専務取締と共に指導部を形成した。⁵⁴

四国水力電気 of 西祖谷土木建築事務所所長は村井茂主任である。以下、淵野技師長、中山内務技師、山岡通信技師、大野技師、倉重顧問、中野当社員、小泉技手、宮原技手、藤田技手、細井技師補の一名が担当した。大倉組は美馬郡西祖谷山村一字に作業所を置いた。大倉組の社員は、所長が望月章で、草下、池野、石田、本田、橋本、中野、田島、渡辺の計九名である。⁵⁵ 大倉組の配下の氏名は明らかではない。

工事用地の買収をめぐつて、四国水力電気と住民の間で対立が生じた。技師の藤田一行は若宮谷の予定地で測量を開始した。すると鎌や柄鎌を持ち、後鉢巻を締めた十数名の若者が一団となって登場し、「ヒトの土地にはいるな」「オランクの土地をハカルな」「グズグズすると切り殺すぞ」と罵声を浴びせかけた。一字の有力者である横川篤一が仲介に入り、一件は落着いた。⁵⁶

一九三四年五月、内務省の野口水力課長一行と徳島県の菅土木課長、中山技師は現場を視察した。野口水力課長らは堰堤の地盤が軟弱だと指摘して、菅土木課長、中山技師と議論を交わした。⁵⁷ 同年六月、内務省の中島技師、山岡技師が堰堤工事中の若宮谷を検査・監督した。これに合わせて徳島県の中山技師が現地を案内した。⁵⁸ 工事では工事用地の土地収用法適用を巡って、間宮儀一（三好郡池田町）から提訴があった。このため裁判が行われており、一九三四

年一二月に東京行政裁判所で第三回口頭審問が予定されていた。⁵⁹

大倉土木の社史では、工事の状況について「天災と物価や賃金の上昇に伴う損失や、岩質が悪いための幾多の困難があつたが、無事完成した」と簡単に書いてある。だが工事竣工後に大倉土木が刊行した竣工記念写真真帳では、より詳細に工事の困難をふり返っている。「満三年間工事従業員ノ具サニ嘗メタ辛酸ハ筆紙ノヨク盡ス所デナイ。難工事ニモ種々アル、物価労銀ノ騰貴ニヨル損失、天災ニ依ル不慮ノ厄禍、文化ノ未開、地勢交通ノ不便ニ依ル作業上ノ困難、掘鑿岩質ノ予想ト著シク反セル為採算上ノ蹉跌等。凡ソ此等ノ何レヲモ具備シタルモノガ本工事デアツタトイフモ過言デナイ」。⁶¹ 一般的な難工事に加え、急峻な山岳地帯であるため「文化ノ未開、地勢交通ノ不便ニ依ル作業上ノ困難」がさらに工事を困難にした。

一九三六年六月三日午前九時から一字発電所の落成式が行われた。参加者は、真屋徳島県知事代理、徳島県の岡本技師、五島技師、福家工事監督補、赤川県会議員、池田警察署長、板野工区長、松永池田町長、堀川西祖谷村長、大倉土木の池野敏夫常務、四国電力の田中常務、淵野技師長等の一五〇名である。⁶²

(2) 工事現場と労働者

『徳島毎日新聞』には労働者について六件の記事がある。工事中の事故が五件、現場からの逃亡が一件である。この記事によって、朝鮮人労働者の存在が確認できる。

- ① 一九三三年一〇月五日午前八時頃、川床変更工事中に隧道が崩壊し、六名が生き埋めになった。六名は西祖谷の

戦前の吉野川水系祖谷川の発電所工事と朝鮮人労働者（広瀬）

岡崎明（二二歳）、宮地勝義（四〇歳）、三好郡三縄村の中川忠一（一八歳）、岡山県の東文太郎（四四歳）、秋田県の後藤義太郎、朝鮮人の田村今賢こと鄭英賢（三四歳）である。宮地は飛び出して無事で、田村、後藤は救出された。しかし、岡崎、中川、東の三名は死亡した。岡崎は今年が適齢で騎兵として入隊する予定だった。これは工事開始後初の事故であり、一時は大騒ぎになった。⁶³

- ② 一九三三年一〇月一七日午後六時、美馬郡西祖谷山村の梅本信市（二二歳）が突然爆発したダイナマイトのために頭部と心臓部に重傷を負って死亡した。⁶⁴

- ③ 一九三三年一二月一八日午後四時、鉄工職の山本武雄（三一歳）は工事用器具を自転車に積んで疾走中、誤って谷間に墜落して頭部を強打し即死した。⁶⁵

- ④ 一九三四年五月一六日午後一〇時、取水口工事をしていた李芳根（二七歳）、成奉根（四一歳）は崩落してきた巨岩の下敷きになった。李は頭部と胸部を負傷して死亡した。成は三週間の重傷を負った。李の本籍は慶尚南道咸陽郡で、故郷には妻、三人の子供、老母がいた。李は一九三三年春から現場で働き始め、給与その他は郷里に送金しており、「まれにみる青年」と評された。⁶⁶

- ⑤ 一九三四年四月、土工の東条虎市（美馬郡江原町）ほか一二名は現場から逃亡し、脇町警察署に過酷な工事現場の状況を訴えた。彼らは四月二日、三日頃、和歌山県和歌山市の梶原幸治（二八歳）から「好き儲け口があるから人夫を連れて祖谷の工事場へ出稼に行かむか」と勧められた。このため梶原は一二名を連れて現場に入った。

しかし、「過酷なる行為を以つて春の日永に夜から夜への酷使には流石の土工稼人も閉口して、給金もろくに支給されず半死半生となったので一行は申し合せ」、四月六日の夜に逃亡を企てた。一二名は無事に逃亡したが、東条は梶原に見つかり、二、三日は再び酷使された。すきを見て再び逃亡した。⁶⁷この記事は一字発電所工事の現場が普通の土工から見てもとても過酷だったことを示している。

- ⑥ 一九三四年二月一日、大倉組配下の竹谷組専用トラック運転手の黒省浩（二四歳）と紫藤鋏次郎（三〇歳）は池田町へ、米を買い入れのため向かった。美馬郡西祖谷山村朝日浦で運転を誤り、午前一〇時にトラックが谷底に転落して、二人は重傷を負った。⁶⁸

四・国鉄土讃本線工事と労働者

（1）土讃線工事の進展

大量の労働者を四国に集め、さらに工事の拡大によつて土建労働者を四国の内陸部に送り込んだのが国鉄土讃本線（香川県の多津―高知県の窪川）工事である。この線路は四国山脈を横断して瀬戸内海側と土佐湾の両地方を結び、さらに高知から土佐湾沿いに南西の高知県下の主要都市を結ぶ幹線である。延長は一九八・九kmで、予讃本線の多津を出発し、琴平、阿波池田、土佐山田、高知、須崎を経て、窪川に至る。土讃本線はさらに高知線（須崎―土佐山

戦前の吉野川水系祖谷川の発電所工事と朝鮮人労働者（広瀬）

田間）、土讃線（琴平―土佐山田間）、窪川線（須崎―窪川間）に分けられる。ここでは香川県、徳島県内の土讃線を中心に、各区間の建設事情を見てみる。⁶⁹

土讃線は既設の多津―琴平間（一八八九年開通）鉄道の終点である琴平を起点として、阿波と讃岐の国境の猪の鼻峠を貫いて、徳島本線の始点の池田を経て、土佐山田にいたる延長一〇・三kmの鉄道である。これはさらに土讃北線（琴平―土佐岩原間）、土讃南線（土佐岩原―土佐山田間）に分けられる。本線は高松、高知の両都市を短絡する横断線で、四国における旅客、貨物の運搬形態に大変革を与えるとともに、土佐、讃岐、阿波三国の地方開発に多大な効果をもたらした。⁷⁰

まず土讃北線を見てみよう。工区は一五工区に分けられて施工された。各工区の詳細は表2の通りである。工事は一九二〇年九月から一九三五年三月まで一四年半にわたり、途切れることなく続いた。⁷¹特に第八工区から吉野川を渡って右岸工事となり、ここから一四工区までが吉野川上流の山岳地帯での難工事である。

建設業者の顔ぶれを見てみる。西松組（現在の西松建設）は西松桂輔（一八五〇―一九〇九）が創業し、一九一四年に子の西松光治郎（一八七三―一九三五）が西松工業所（本店は京都市）を設立した。主に鉄道工事を受注し、これを一九一六年に西松組と改めた。⁷²西松組の『創業回顧』では土讃線第一工区、第二工区を受注したと書き、『西松建設創業百年史』では土讃線第二工区を受注したと記述している。⁷⁴松浦伊平（一八九〇―一九七二）は香川県綾歌郡出身である。家業を継ぎ、一九一六年に松浦組を設立した。県内の工事を初め、鉄道工事としては紀勢西線、作美線、

表2・国鉄土讃北線の工事概要（1920～1935年）

工区	工事期間	区間	延長	建設会社	請負金額	主な工事の内容
1	1920年3月～ 1921年10月	琴平～塩入	8k198 m	西松組	26万 6000円	小橋梁が6カ所
2	1921年2月～ 1922年8月	塩入～荒戸	6k95 m	西松組	42万 6000円	財田川、多治川の2橋梁
3 甲	1921年12月～ 1927年3月	荒戸～ 戸川隧道坑口	1k477 m	松浦伊平	11万円	高い切取と盛土
3 乙		戸川隧道	327.9 m	国鉄直轄		戸川隧道
4		猪の鼻隧道	3k845 m	国鉄直轄		猪の鼻隧道
5		猪の鼻隧道		国鉄直轄		猪の鼻隧道
6		坪尻隧道	295.7 m	国鉄直轄		坪尻隧道
7	1926年5月～ 1928年6月	落～州津	3k314 m	西本組	97万 9000円	急勾配と急曲線が多い
8	1926年5月～ 1927年12月	州津～佃	3k78 m	坂本組	35万 3000円	吉野川橋梁（最長）
9	1929年4月～ 1931年3月	池田～中西	3k652 m	坂本組	40万 2000円	丸山隧道（617 m）
10	1931年10月～ 1933年8月	中西～猫坊	3k200 m	坂本組	34万 4000円	6橋梁、2隧道
11	1932年3月～ 1934年8月	猫坊～国政	5k962 m	坂本組	51万 2000円	13橋梁、2隧道
12	1932年9月～ 1934年4月	国政～西宇	3k560 m	坂本組	27万 6000円	小歩危の難所。7隧道
13	1933年4月～ 1935年3月	西宇～赤間	5k13 m	大倉土木	53万 8000円	大歩危の難所。16隧道
14	1933年4月～ 1935年3月	阿波赤間～ 土佐岩原	5k849 m	大倉土木	60万 5000円	県境の山岳地帯。19隧道

日本鉄道建設業協会『日本鉄道請負業史－大正・昭和（前期）篇』（同会、1978年）520～529頁から作成。

三呉線の工事を受注した。さらに「満洲国」にも進出し、満洲松浦組を設立した。一九三七年に衆議院議員（立憲政友会）となる。⁷⁵ 西本組は西本健次郎（二八六六～一九五〇）が和歌山県を基盤とする同社を義父から引き継いだ。後に日本を代表する建設会社と成長する。西本は後に貴族院議員も務めた。⁷⁶ 坂本組は高知県出身の坂本和吉（二八七二～？）が一九一六年に創業し、一九二三年に合資会社へ変更した。一九三三年時点では唯一の現場が土讃北線工事

だった。長期間にわたって工事を担当したのは小里一である。⁷⁷

大倉土木は先に述べた。四国水力電気から一字発電所工事を受注したので、大倉土木はほぼ同時期に徳島県内の土讃北線（一三・一四工区）工事と一字発電所工事を施工していたのである。大倉土木の社史では、「土讃線工事（大歩危、小歩危付近）」とだけ記述しているにすぎない。⁷⁸

続いて、土讃南線を見てみる。現場は高知県内であり、七工区に分けられ、全て鉄道工業が受注した。請負金額は合計六三四万八千円である。一社の請負金額としては大工事だった。工期は一九二六年二月から一九三四年一月まで八年九カ月を費やした。⁷⁹ 鉄道工業は一九〇七年に菅原恒覧（一八五九～一九四〇）が初代社長となった建設会社である。菅原は東京帝国大学を卒業後、鉄道局に入った。一九〇二年に退職し、菅原工業所を樹立した。⁸⁰

また、土讃線工事以外にも高松から瀬戸内海に沿って徳島に至る延長七四・八kmの高徳線工事も一九二二年二月から一九三五年三月まで約三年間実施された。これは高松―徳島間を九工区、吉成―佐古間を一工区とした。工事を請負ったのは、樋笠茂市、藤原兵太郎（岡山）、西本組、銭高組である。⁸¹

（２）工事現場と労働者

以上で述べたように、長期間にわたる土讃北線工事に参加した建設会社は、西松組、松浦正夫、西本組、坂本組、大倉土木の五社、土讃南線工事に参加したのは鉄道工業である。これらの六建設会社の工事現場には大量の労働者が集まったと想定される。

『徳島毎日新聞』には労働者に関する記事が五件ある。三件は工事中の事故、一件は飯場での日本人と朝鮮人の乱闘事件、一件は日本人間の喧嘩である。これによって朝鮮人労働者の存在が確認できる。

① 一九三三年六月三〇日午前七時半、土讃北線第一一工区(坂本組)で朝鮮人飯場の梅本清吉こと呉秉珠(四〇歳)(慶尚南道昌原郡出身)と同居の小林茂こと尹善澤(二四歳)他五名が近くに飯場をもつ島根県生まれの為国江藏(四一歳)を「言葉の行違い」で袋だたきにする事件が発生した。為国は全治二週間の傷を負った。警察の調べによれば、尹は以前為国の帳場で働いたことがあった。この日、為国が煙草を吸いながら監督をしていたところ、その吸い殻が尹の手の上に落ちた。尹が朝鮮語で「熱い」と言ったが、為国は朝鮮語がわからないので「馬鹿野郎」と言った。二人は口論になり、為国は尹をねじふせて殴打した。尹は逃げ帰り親分の呉に事情を話すと、呉は一九名の子分に復讐を命じた。多くは近くの者に止められたが、尹の他の六名はこれを逃れ、為国方に行き、彼を引きずり出して殴打した。⁸²これからは、飯場主の呉と為国の対立構造があったこと、呉は朝鮮人の子分一九名を持つ地位にあったことがわかる。

② 一九三三年七月一三日午後一時、旅館料理業の松浦市助(三六歳)と内田の二人は松浦方において土讃北線工事の北政飯場内の土工川越渡(二七歳)を酒の上での口論から袋叩きにして、川越の右足を骨折させ、全治七週間の傷を負わせた。警察の調べによると、川越と横尾某は松浦方で酒を飲んでいたが、酔いが廻ると二階に上がり他人の室内に乱入した。松浦がこれを阻止しようとして口論になり、内田が松浦に加勢したのだ⁸³。

③ 一九三三年一〇月二五日午後四時、とび職で群馬県生まれの松下与四郎（二八歳）は土讃北線の第一吉野川鉄橋橋桁設置中、鉄塔上でワイヤーの掛け渡しを行っていたが、誤って鉄塔から吉野川に墜落し、岩石に頭を打ちつけて死亡した。⁸⁴

④ 一九三四年二月二九日午後二時半、土讃南線工事現場で朝鮮人土工孫庚保（二四歳）（慶尚南道河東郡出身）は作業中、上部から転落してきた岩石に頭部を粉碎され死亡した。⁸⁵

⑤ 一九三四年八月一日午前八時、土讃南線の三縄鉄道工事中に井川盛三（三九歳）は鉄道建設用材料列車から材料が転げ落ちたのを機械で回収中、その機械が転倒したために頭部を強打し即死した。⁸⁶

土讃本線工事について、『池田町史』は次のように記録する。「国鉄土讃本線の阿波池田・三縄駅（三一五二メートル）の工事は、昭和四年に着工し、昭和六年三月に完成した。開業は同年九月であった。この工事の労務者は、朝鮮から来た人がほとんどで、板野に飯場が設けられ、仮宿舍で寝泊まりをしながら作業していた。今日のように、ブルドーザーやショベルカー等はなく、ほとんどが人力に頼る工事であった。一部ダイナマイトの使用によって丸山隧道（六一七メートル）及び板野中央部を横断掘削して、土砂をトロツコで運搬、板野下島上の田畑を埋め立て、道床を構築し、鉄道を敷設した」。⁸⁷これは第九工区（池田―中西間）であり、工事は一九二九年四月に着工し、一九三二年三月に竣工した。つまり、一九二九―一九三一年には多数の朝鮮人労働者が土讃北線工事に従事していたことがうかがえる。ただ、日本人と朝鮮人の比率は検討の余地がある。

また、篠原晴美は山城町役場のそばに住む大和弘の証言を紹介している。「このあたりの鉄道工事は、昭和九年に仕上がった。昭和七、八年ごろにかけて、家のすぐ裏手、吉野川と銅山川の合流点のわずかな台地に、朝鮮人たちが掘立て小屋を作って住み、工事にあたっていた。飯場には二十人ぐらい居たと思う」。⁸⁸ 続いて、篠原晴美は李龍福の妻の証言を紹介している。「昭和五、六年ごろ箸蔵で働いていた数百人の朝鮮人たちは、工事の進みぐあいにあわせて祖谷川のダム工事や、一字、貞光方面の道路工事に散っていった」。⁸⁹ つまり、この証言が正しいとすれば、朝鮮人労働者は土讃本線鉄道工事、一字発電所工事、道路工事などの各種土木工事に流動的に従事していたのである。

おわりに

以上述べたことを要約すれば、次の通りである。

一九三一年時点における徳島県内朝鮮人の数は一七二九名であり、これは四七都道府県の中で下から一四位だった。職業は土木建設業が圧倒的で三三・四%を占め、有業者全体では五九・五%にも達した。学歴は「文盲者」と小学校程度だけで八一・四%である。朝鮮人各種団体は融和団体が一つしかなく、加盟者数では都道府県の中で下から四番目の少なさだった。一九三九年から強制連行により、一一〇名以上が高城鉦山（日本鉦業）、伊予川発電所工事、軍工事等に動員された。

吉野川水系祖谷川には発電所工事が集中した。一九一〇年代から二つの電力会社（四国水力電気、祖谷川水力電気）によって、四つの水力発電所（三縄発電所、祖谷発電所、出合発電所、一字発電所）が設置された。これらの工事には多数の労働者（日本人、朝鮮人）が従事したと推定される。三縄発電所工事（一九一一年着工、一九一二年竣工）は直営だったと思われ、時期的に見て朝鮮人が存在した可能性は低い。飛鳥組、森本組が施工した祖谷発電所工事（一九二二年着工、一九二二年竣工）、飛鳥組が施工した出合発電所工事（一九二五年着工、一九二六年竣工）には朝鮮人労働者が従事した可能性が大きい。大倉土木が施工した一字発電所工事（一九三三年着工、一九三六年竣工）は規模も大きく、長期に及んだ。新聞記事から朝鮮人労働者の就労が確認できる。

国鉄土讃本線工事は高知線、土讃線、窪川線からなる。土讃線工事の中、主に徳島県の土讃北線工事は一九二〇年から一九三五年まで一四年半に及んだ。この工事が多くの労働者を四国に誘引し、内部に浸透させる契機になった。建設会社は西松組、松浦組、西本組、坂本組、大倉土木の五社である。新聞記事から朝鮮人労働者の就労が確認できる。

徳島県内の朝鮮人労働者は発電所工事、鉄道工事など各種土木工事に従事し、長期化する各地の工事現場を建設会社、配下、親方、同僚とともに流動化して行ったと思われる。

1 広瀬貞三「三信鉄道工事と朝鮮人労働者―『葉山嘉樹日記』を中心に」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』四号（二〇〇一年三月）、「太田川水系発電所工事と朝鮮人労働者」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』九号（二〇〇六年三月）、「戦前の富士川水系笛吹川改修工事と朝鮮人労働者」『福岡大学人文論叢』四八巻一号（二〇一六年六月）、「戦前の木曽川における発電所工事と朝鮮人労働者」『福岡大学研究部論集A…人文科学編』一八集二号（二〇一八年十二月）、「戦前の庄川における小牧ダム建設と朝鮮人労働者」『福岡大学人文論叢』五一巻三月（二〇二〇年三月）。

2 朝鮮人強制連行真相調査団編著『朝鮮人強制連行調査の記録―四国編』（柏書房、一九九二年）八二頁。

3 今回は一字発電所工事に限定して、一九三三年五月から一九三六年五月までの三年分を調査した。一九一〇～一九二〇年代の徳島県を代表する新聞は発行部数の順で、徳島毎日新聞、徳島日日新聞、徳島公論である。徳島県史編さん委員会編『徳島県史』六巻（同県、一九六七年）六四八頁。徳島県内新聞の戦前の状況は、徳島新聞五十年史刊行委員会編『徳島新聞五十年史』（同社、一九九七年）一章、二章（一～八二頁）参照。

4 内務省警保局「社会運動の状況」「特高月報」、朴慶植編『在日朝鮮人関係資料集成』三巻（三一書房、一九七六年）四四〇～四四一頁。（以下、『資料集成』とする）。

5 前掲書『資料集成』三巻、四四五～四四八頁。

6 「内地在留朝鮮人職業別調」（昭和十一年）、前掲書『資料集成』三巻、付表。

戦前の吉野川水系祖谷川の発電所工事と朝鮮人労働者（広瀬）

7 前掲書『資料集成』三卷、四三七～六一五頁、「朝鮮人出身道別調」「在留朝鮮人教育程度調」（昭和二年）、前掲書『資料集成』三卷、付表。

8 一史料は徳島県の朝鮮人の数を一九二五年に二一〇名、一九三五年に一一六名、一九三九年末に一二二四名と記録している。
樋口雄一 解題『協和事業年鑑・復刻版』（社会評論社、一九九〇年）六七頁。

9 徳島県警察史編さん委員会編『徳島県警察史』（徳島県警察本部、一九六五年）一一〇〇頁。この事件について、浜野虎七編『撫養町誌』全三卷（鳴門市、一九五四年）、鳴門市史編纂委員会編『鳴門市史』全三卷（同市、一九七六～一九八八年）には関連する記述がない。

10 『徳島毎日新聞』一九三四年一〇月二六日。

11 前掲書『資料集成』三卷、二九八頁。

12 『徳島毎日新聞』一九三四年一〇月三日。

13 『徳島毎日新聞』一九三四年一〇月一七日。

14 「在日朝鮮人統制組織」「協和会」機関誌、朴慶植編『朝鮮問題資料叢書』四卷（アジア問題研究所、一九八二年）八六頁。前掲書『協和事業年鑑・復刻版』六七頁。協和会については、樋口雄一『協和会―戦時下朝鮮人統制組織の研究』（社会評論社、一九八六年）、木村健二『一九三九年の在日朝鮮人』（ゆまに書房、二〇一七年）、在日朝鮮人団体事典編纂委員会編『在日朝鮮人団体事典』（民族問題研究所、二〇二一年）の関係項目を参照。

- 15 前掲書『徳島県警察史』一〇五三～一〇五五頁。
- 16 前掲書『朝鮮問題資料叢書』四卷、一八五頁。
- 17 池田町史編纂委員編『池田町史』上巻（同町、一九八三年）三三三～三三四頁。
- 18 豊田思九「補導員として」、前掲書『朝鮮問題資料叢書』四卷、四六九頁。
- 19 中央協和会（昭和十七年）「移入朝鮮人労務者状況調」、小沢有作編『近代民衆の記録10・在日朝鮮人』（新人物往来社、一九七八年）四一七頁。
- 20 前掲書『朝鮮人強制連行調査の記録―四国編』六一～一〇三頁。
- 21 建設省河川局監修『吉野川―その治水と利水』（国土開発調査会、一九六七年）四～一一頁。吉野川の改修工事については、建設省徳島工事事務局『吉野川百年史』（同局、一九九三年）参照。吉野川における水資源開発公団の活動については、水資源開発公団吉野川開発局『吉野川の水資源開発二十年のあゆみ』（同局、一九八七年）参照。
- 22 徳島新聞社調査事業局編『徳島県百科事典』（同社、一九八一年）一六三頁、とくしま地域政策研究所編『四国のいのち吉野川事典―自然・歴史・文化』（農山漁村文化協会、一九九九年）三一頁。祖谷の地理・民俗については、園尾正夫『日本三大秘境祖谷街道をゆく』（南海ブックス、一九七九年）参照。
- 23 四国電力50年史編纂事務局編『四国電力50年のあゆみ一九五一―二〇〇一』（同社、二〇〇一年）三二八～三三一頁。詳細は、四国電力『四国地方電気事業史―経済社会の発展を通じて』（同社、一九八四年）参照。

戦前の吉野川水系祖谷川の発電所工事と朝鮮人労働者（広瀬）

24 前掲書『四国電力50年のあゆみ一九五一―二〇〇一』三三二頁。

25 前掲書『四国電力50年のあゆみ一九五一―二〇〇一』三三二―三三三頁。詳細は進杏夢編『四水三十年史』（四国水力電気、一九二八年）参照。景山については白川富太郎編著『景山甚右衛門翁伝』（景山翁遺徳顕彰会、一九六八年）、福沢については大西理平『福沢桃介翁伝』（福沢桃介翁伝記編纂所、一九三九年）、寒川については寒川恒貞伝編纂委員会編『寒川恒貞伝』（社会教育協会、一九四九年）参照。

26 日本発送電株式会社解散記念事業委員会編『日本発送電社史―技術編』（同会、一九五四年）三六頁、一〇一―一〇六頁、前掲書『四国電力50年のあゆみ一九五一―二〇〇一』三三五―三三六頁。

27 近藤辰郎編『山城谷村史』（山城町役場、一九五九年）八七九―八八一頁。伊予川開発は戦後再び工事を開始し、一九四七年八月に竣工した。発電所は地下に設置された。一九四九年一月伊予川発電所は伊予川開発から日本発送電に譲渡され、その後は一九五一年五月に発足した四国電力に引き継がれた。四国電力が発足した後の住友共同電力との関係は、四国電力10年史編纂委員会編『四国電力10年のあゆみ』（同社、一九六一年）二四八―二五〇頁参照。

28 三縄村史編纂委員会編『三縄村史』（同会、一九六〇年）五六三―五六四頁。三縄発電所は老朽化のため、近くに（新）三縄発電所（出力七千kW）が建設され、一九五四年四月から運転を開始した。これが現在の三縄発電所である。以前の三縄発電所は一九五九年一二月に廃止された。前掲書『四国電力10年のあゆみ』三四頁。

29 前掲書『四水三十年史』四五―四九頁。

30 前掲書『四水三十年史』一八一～一八二頁。

31 横山春陽「祖谷発電所建設の裏話」、久米惣七・原三正・今市正義共編『祖谷―阿波の平家部落』（祖谷刊行会、一九五六年）二五六～二五九頁。祖谷の近代化、祖谷川水力電気の構成員、発電工事の土地買収への住民の反対活動等、興味深い話が多数語られている。

32 喜多重昌・片瀬頼政・前川嘉吉編『西祖谷村史』（同村役場、一九六九年）二二七頁、前掲書『徳島県史』六卷、四二四頁。

33 前掲書『西祖谷山村史』二一七頁。

34 前掲書『西祖谷山村史』二二二～二三三頁、東祖谷山村誌編纂委員会編『東祖谷山村史』（同村、一九七八年）三八〇頁。

35 前掲書『東祖谷山村史』三八〇頁。

36 飛鳥建設社史編纂室編『飛鳥建設株式会社社史』上巻（同社、一九七二年）参照。飛鳥文吉については、飛鳥翁伝記編纂会編『飛鳥文吉』（同会、一九六一年）参照。

37 森本組百年史編集委員会編『森本組百年史』（同社、一九九二年）四二～四三頁。森本組は一九三八年一月に完成した太田川水系太田川（広島県）の鱒溜ダム・土居発電所工事で朝鮮人労働者を使用していた。前掲論文広瀬貞三「太田川水系発電所工事と朝鮮人労働者」『新潟国際情報大学情報文化学部紀要』九号（二〇〇六年三月）五一～五二頁。

38 前掲書『森本組百年史』二七～二八頁。

39 岡田亀太郎『思い出の祖谷』（同人、一九七五年）四～五頁。

戦前の吉野川水系祖谷川の発電所工事と朝鮮人労働者（広瀬）

一〇六九

- 40 前掲書岡田亀太郎『思い出の祖谷』五頁。
- 41 前掲論文広瀬貞三「戦前の庄川における小牧ダム建設と朝鮮人労働者」『福岡大学人文論叢』五一卷三号（二〇二〇年三月）一六〇頁。
- 42 前掲書久米惣七・原三正・今市正義共編『祖谷―阿波の平家部落』二六二頁。
- 43 前掲書『四水三十年史』一八四―一八九頁。
- 44 前掲書『西祖谷山村史』二二二―二三三頁。
- 45 前掲書『四水三十年史』一八四―一八九頁、前掲書『三縄村史』五六四―五六五頁。
- 46 前掲書『飛鳥建設株式会社史』上巻、一三三―一三四頁。
- 47 前掲書『飛鳥建設株式会社史』上巻、三一三―三一四頁。
- 48 前掲書『飛鳥建設株式会社史』上巻、一三三―一三四頁。
- 49 『徳島毎日新聞』一九二五年四月二一日、前掲書『池田町史』上巻、九一六頁。
- 50 前掲書『池田町史』上巻、七四五頁。
- 51 前掲書『西祖谷山村史』二一八頁。
- 52 西祖谷山村史編纂委員会編『西祖谷山村史』（同村、一九八五年）二九九―三〇〇頁。
- 53 「一字発電所工事概要」、大倉土木株式会社大阪出張所『一字発電水路工事竣工記念』（同社、一九三六年）（広瀬貞三所蔵）。実

際の写真六〇枚が貼られている。『徳島毎日新聞』一九三六年五月二九日、前掲書『西祖谷山村史』（一九六九年）二一八～二二三頁。「竣工近き四国水力電気株式会社 一字発電工事」『土木建設雑誌』一四卷一二号（一九三五年二月）口絵に工事写真が二葉ある。

- 54 津田誠一『土木人物語』（ジャパンレールウェイ社、一九三三年）二三～三三頁、社史発刊準備委員会編『大成建設社史』（大成建設、一九六三年）参照。門野については同人『平々凡々九十年』（実業之日本、一九五六年）、横山については大谷荒太郎『横山信毅』（宏隆社、一九三五年）参照。
- 55 『徳島毎日新聞』一九三六年六月三日。
- 56 前掲書『西祖谷山村史』（一九六九年）二一八～二二〇頁。
- 57 『徳島毎日新聞』一九三四年五月一七日。
- 58 『徳島毎日新聞』一九三四年六月一八日。
- 59 『徳島毎日新聞』一九三四年二月九日。
- 60 前掲書『大成建設社史』二七三～二七四頁。
- 61 池野敏夫「序」、前掲書『一字発電水路工事竣工記念』頁数なし。
- 62 『徳島毎日新聞』一九三六年五月二八日、二九日、六月三日、五日。
- 63 『徳島毎日新聞』一九三三年一〇月七日。

戦前の吉野川水系祖谷川の発電所工事と朝鮮人労働者（広瀬）

- 64 『徳島毎日新聞』一九三三年一〇月二〇日。
- 65 『徳島毎日新聞』一九三三年二月一八日。
- 66 『徳島毎日新聞』一九三四年五月一八日。
- 67 『徳島毎日新聞』一九三四年六月二〇日。
- 68 『徳島毎日新聞』一九三五年一月一二日。
- 69 日本鉄道建設業協会『日本鉄道請負業史―大正・昭和（前期）篇』（同会、一九七八年）五一―五頁、五二〇―五二二頁。土讃線工事の概要は、竹股一郎「建設中の土讃線に就て」『土木建築工事画報』九卷六号（一九三三年六月）五三―五九頁、田端瑞穂「土讃線建設工事概要」『土木建築工事画報』一二卷一号（一九三六年一月）五三―六〇頁、鉄道省岡山工事事務所編『土讃線建設概要』（同所、一九三六年）参照。戦後に国鉄はこれを土讃線と改称した。土讃線の鉄道観光のイメージは、講談社『週刊鉄道の旅34・中国四国6・土讃線予土線』（同社、二〇〇三年一〇月）、JTB『日本列島鉄道紀行30・中国四国6・土讃線』（JTBパブリッシング、二〇〇七年六月）参照。
- 70 前掲書『日本鉄道請負業史―大正・昭和（前期）篇』五二〇―五二二頁。
- 71 国鉄直轄とした第三工区乙、第五工区、第六工区の猪の鼻隧道工事については、鉄道省岡山工事事務所編『土讃北線猪之鼻隧道工事誌』（同所、一九二九年）参照。吉野川橋梁については、鉄道省岡山工事事務所編『土讃北線吉野川橋梁工事誌』（同所、一九二九年）、浅間逸雄・稲石洋八郎「土讃北線吉野川橋梁のケーブル・エレクトリシオンに就て」『土木学会誌』二〇卷五号

(一九三四年五月) 三五七～三六七頁参照。また、これに先立ち一八九四年五月、四国新道(丸亀―多度津―琴平―高知、松山―久万―高知)が竣工した。猪の鼻峠から戸川までの工区は、近藤吉治郎が請け負った。大岩義雄編『猪ノ鼻道路の今昔』(黒川征一、二〇二一年) 二七～五五頁。

72 佐野勇吉編『創業回顧』(同人、一九四〇年)、西松建設『西松三好追悼録―西松三好さんを偲んで』(同社、一九七二年)、創業百年史編纂委員会編『西松建設創業百年史』(同社、一九七八年) 参照。

73 前掲書『創業回顧』四頁。

74 前掲書『西松建設創業百年史』四三頁。

75 磯野實編『松浦伊平翁伝』(富田真造、一九七八年)、四国新聞社出版委員会編『香川県大百科事典』(同社、一九八四年) 八六四頁。

76 前掲書津田誠一『土木人物語』一二七～一三四頁、三井建設社史編纂室編『三井建設社史』(同社、一九九三年) 一～四四頁。西本組は一九四五年五月に三井建設工業(現在の三井住友建設)へ合併吸収された。

77 沢翠峰・尾崎吸江『良い国良い人―東京に於ける土佐人』(青山書院、一九一七年) 二〇五～二〇八頁、前掲書津田誠一『土木人物語』八三～九二頁。

78 前掲書『大成建設社史』二八四頁。

79 前掲書『日本鉄道請負業史―大正・昭和(前期)篇』五二二頁、五二九～五三二頁。

戦前の吉野川水系祖谷川の発電所工事と朝鮮人労働者(広瀬

- 80 高崎哲郎『鶴高く鳴けり―土木界の改革者菅原恒覧』（鹿島出版会、一九九八年）、藤井肇男編『土木人物事典』（アテネ書房、二〇〇四年）一六六―一六八頁。
- 81 前掲書『日本鉄道請負業史―大正・昭和（前期）篇』五四四―五四七頁、前掲書『鳴門市史』下巻、六七六―六八三頁。
- 82 『徳島毎日新聞』一九三三年七月六日。
- 83 『徳島毎日新聞』一九三三年七月二九日。
- 84 『徳島毎日新聞』一九三三年一〇月二七日。
- 85 『徳島毎日新聞』一九三四年三月二日。
- 86 『徳島毎日新聞』一九三四年八月二日。
- 87 前掲書『池田町史』上巻、六〇〇頁。
- 88 前掲書『朝鮮人強制連行調査の記録―四国編』八一頁。
- 89 前掲書『朝鮮人強制連行調査の記録―四国編』八二頁。